

2008 年 2 月号 目次

【トピックス】

麻しん情報	1
年末食品一斉収去検査	4
平成 19 年度食品の食中毒菌汚染実態調査(その 2)	7
流通魚中の PCB 検査	8

【感染症発生動向調査】

感染症発生動向調査委員会報告 1 月	9
感染症発生動向調査における病原体検査 1 月	12

【検査結果】

由来別病原菌検出状況 1 月	13
----------------	----

【情報提供】

衛生研究所 WEB ページ情報(その 47)	14
------------------------	----

麻疹情報

平成20年1月1日から麻疹(はしか)は、五類感染症 全数把握対象疾患に変更になり、麻疹を診断した医療機関はすべて最寄りの保健所に届出が必要となりました。

横浜市における麻疹の発生状況 2008年1月分について報告いたします。

< 麻疹の発生動向調査 >

1981年7月 小児科定点からの報告に基づいた小児の麻疹の発生動向調査を開始。

1999年4月から2007年12月31日

「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」に基づき、麻疹及び成人麻疹の発生動向調査を実施。

定点把握

小児科定点	(麻疹)	全国 約 3,000
基幹病院定点	(成人麻疹)	全国 約 500

2008年1月1日 定点把握 対象疾患から、全数把握対象疾患に変更。

その背景として、次の3点があげられます。

- (1) 近年小児科定点からの報告数が大幅に減少してきたこと
- (2) 2007年の流行では、10代、20代での麻疹患者発生数の増加が指摘されましたが、これまでの2種類の定点把握システムでは、流行状況を正確に評価することが困難であったこと
- (3) 今後2012年を目標とする国内からの麻疹排除に向けて、国内の全ての発生例を正確かつ迅速に把握することが必要とされたこと

< 全国・神奈川県の発生状況 >

全国および近隣における麻疹の報告数を表に示しました(表1)。

人口10万対で比較すると、横須賀市66.21と非常に多いことがわかります。横浜市7.41、川崎市2.55でした。

横須賀市では麻疹の流行を防ぐための緊急措置として、麻疹の予防接種を受けたことがなくかつ麻疹に罹患したことがない人を対象(平成20年2月1日から3月31日までの2か月間、満2歳から高校3年生(相当年齢)までの横須賀市民)に、無料の定期外予防接種の機会を提供しています。

表1 全国および近隣における麻疹報告数

(2008年2月16日現在)

	麻疹患者数	人口10万対
全国	1,807	1.41
神奈川県	730	8.19
川崎市	35	2.55
横浜市	269	7.41
県域 (横浜市、川崎市除く)	426	10.91
横須賀市 (再掲)	279	66.21

< 横浜市の発生状況 >

横浜市における麻疹の2008年1月分(診断日:2008年1月1~31日)の報告数は、144人でした。

・区別(図1-1)では、戸塚26人、南19人、金沢15人、栄・港北13人、中11人の順に多く、人口10万対(図1-2)では、栄10.5、戸塚9.9、南9.7、中7.8、金沢7.1の順でした。

栄区の中学校では、2月4日(月)、中学校3年生3人が、麻疹の疑い、もしくは麻疹と同様の症状で欠席したことにより、学校では、高等学校の入学試験を目前に控えている時期であることを考慮し、当該クラスを2月5日(火)から2月8日(金)まで学級閉鎖にしました。

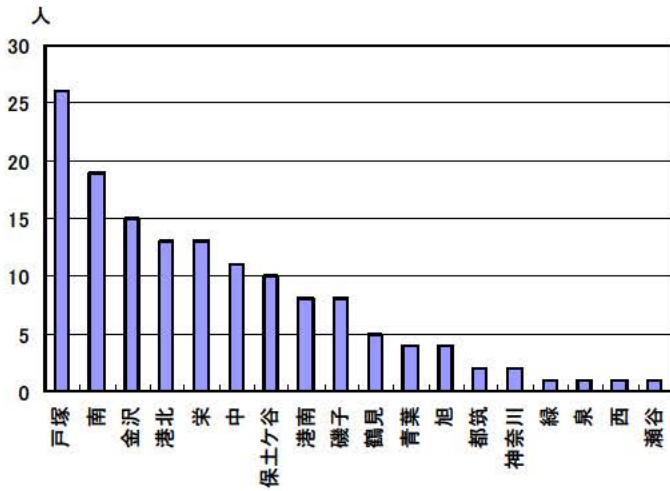


図1-1 区別 麻疹患者累積報告数 (人)

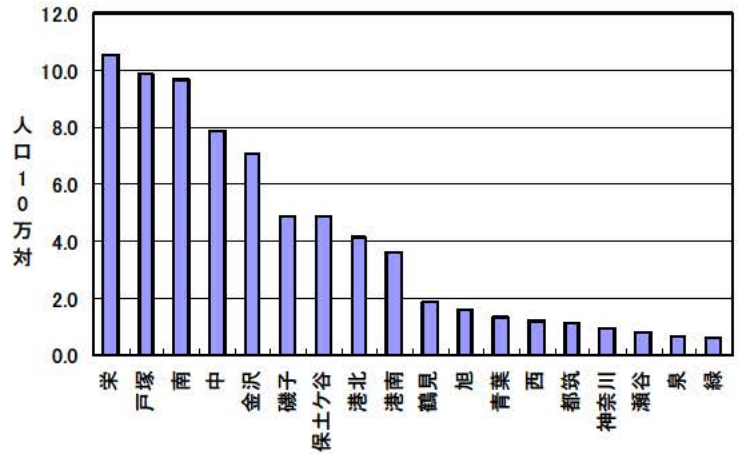


図1-2 区別 麻疹患者累積報告数 (人口10万対)

・年齢別では、10～19歳83人(57.6%)と最も多く、次いで20～29歳28人(19.8%)、0～9歳17人(11.8%)でした(図2)。

・感染地域は、すべて国内(確定28人、推定116人)で、横浜市83人、神奈川県(横浜市以外)17人、東京都2人、不明42人でした。

・病型は、修飾麻疹(検査診断人)3人(11歳、13歳、34歳)、麻疹(検査診断例)37人、麻疹(臨床診断例)104人でした。

・麻疹ワクチン接種歴別では、接種歴有り31人(21.5%)、接種歴無し73人(50.7%)、接種歴不明40人(27.8%)であり、接種歴無しが最多でした(図3)。

2回接種者からの発生はありませんでした。

0歳児7人(2か月1人、7か月2人、8か月1人、9か月1人、11か月2人)は、すべて接種歴無しで、定期接種対象外のため、大人からの感染を受けてしまう被害者となっています。

また、0～19歳では接種歴無しが多く、20歳以上では接種歴不明が多いことがわかりました(図4)。

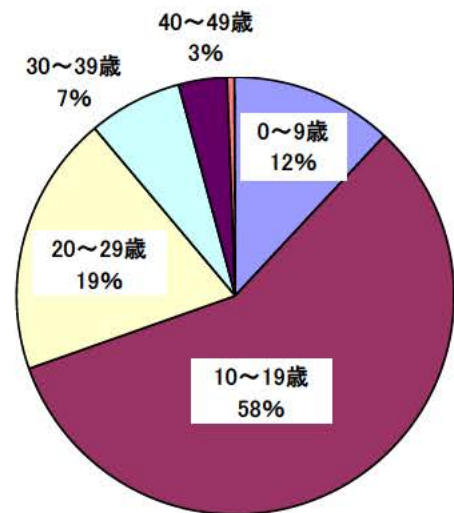


図2 年齢別割合

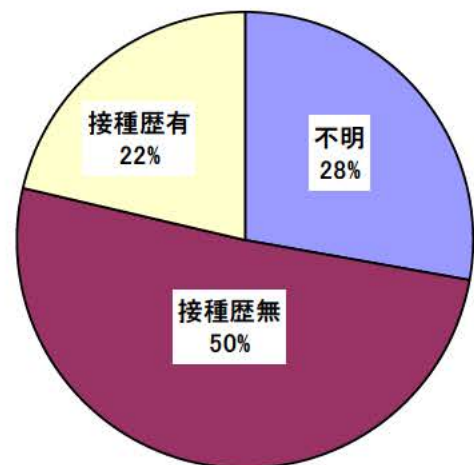


図3 ワクチン接種歴別割合

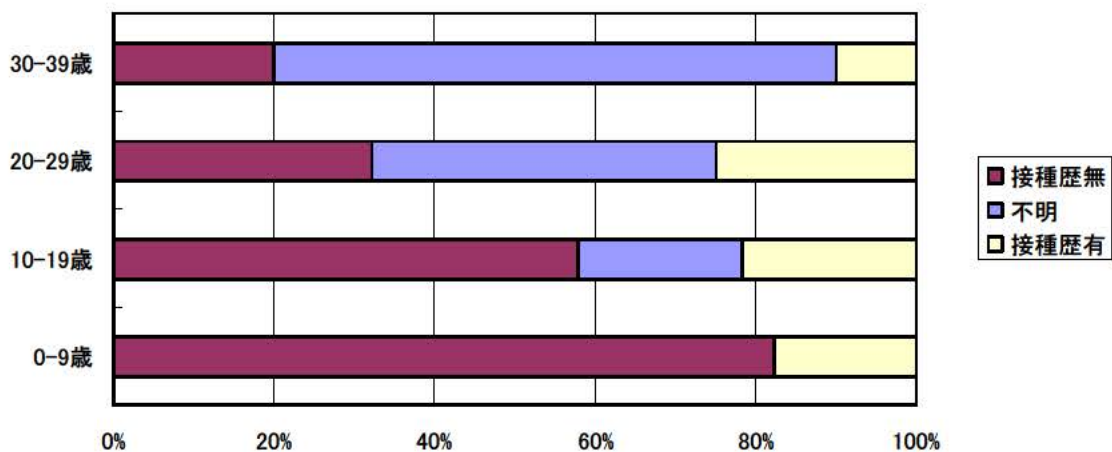


図4 年齢別ワクチン接種歴別割合

昨年の流行時に推定されていた通り、10代、20代での患者発生割合が多く、特に10代(10～19歳)の患者発生割合は約60%近くを占めています(図2)。

感染症発生動向調査による麻しんの全数報告は、まだ始まったばかりなので、報告が遅れている可能性もあります。

<麻しん排除にむけて>

麻しんは例年春季から夏季にかけて発生報告数が増加する疾患であり、今後麻しんの報告数が大きく増加してくることは十分に予想されます。昨年と同様の流行を招かないためにも、全数把握調査による麻しん発生状況の迅速で正確な把握と、それに続く対応が重要であると思われます。

日本を含むWHO西太平洋地域では、2012年が麻しん排除(elimination)の目標年です。

それに向けてわが国では、

(1) 積極的な感受性者対策、95%以上の予防接種率の達成・維持のための取り組み

- ・2006年度より実施されている1歳代、小学校就学前1年間の2回接種

- ・2008年4月1日より5年間の期限付きで実施される、中学校1年生、高校3年生相当世代への定期接種としての予防接種計画

(2) 2008年1月1日からの全数把握制度による麻しんサーベイランス

(3) 麻しん発生時の迅速な対応

が対策の三本柱として実施されつつあります。

横浜市では、麻しん患者の50%以上がワクチン接種歴がなく、10～19歳の患者が約60%を占めている現状を受け止め、麻しん排除のためには、関係各機関との意思統一と、より一層の連携を図ることが望まれます。

<参考資料>

- ・麻疹(はしか)の流行について(3)

(http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/2008nen/measles.pdf)

- ・横浜市における麻しん発生状況

(http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/2008nen/measles.pdf)

- ・麻疹(はしか)について

(http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/measle1.htm)

- ・麻しんの排除に向けて(横浜市衛生研究所検査情報月報2007年12月号)

(http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/inspection_inf/200712/measles-haijo.pdf)

- ・2012年麻疹排除に向けて(国立感染症研究所) 届出ガイドライン、対応ガイドライン等も載っています

(<http://idsc.nih.go.jp/disease/measles/index.html>)

【 感染症・疫学情報課 】

年末食品一斉収去検査

年末食品等一斉点検は厚生労働省医薬食品安全局食品安全部長から出された「平成19年度食品、添加物等の年末一斉取締りの実施について」に基づき、年末から年始にかけて多種類の食品が短期間に大量に流通するため、食品衛生の確保を目的に全国一斉に実施されました。

本市においては平成19年11月1日から12月30日まで年末取締り期間と定め、一斉点検を行いました。そのうち、食品専門監視班と福祉保健センター等による収去が11月19日から12月26日まで実施され、当所が行った細菌検査と理化学検査の結果について報告します。

1 細菌検査

細菌検査の内訳は、乳等に関しては乳製品・乳類加工品など10検体21項目(表1)、乳等を除く他の食品に関しては冷凍食品・魚肉ねり製品・食肉製品・洋生菓子・そうざいなど261検体671項目(表2)でした。

検査項目は、各々の品目の規格基準や衛生規範について行いました。また、クリームについては黄色ブドウ球菌のエンテロトキシン、非加熱食肉製品(生ハム)についてはリステリア菌、鶏卵を用いた洋生菓子についてはサルモネラ属菌の検査を加えて行いました。

検査の結果、規格基準違反はありませんでした。また、衛生規範不適合は6検体あり、その内訳は洋生菓子の大腸菌群陽性が3検体(50/g、20/g、10/g；基準は陰性)、黄色ブドウ球菌陽性が2検体(いずれも100/g；基準は陰性)、加熱処理したそうざい類の生菌数超過が1検体(460万/g；基準は10万/g以下)でした。

表1 細菌検査結果(乳等の収去検査)

平成19年11～12月

食品区分	検査検体数	検査項目数	不適検体数
乳製品			
ナチュラルチーズ	4	4	0
クリーム	5	15	0
アイスクリーム類・氷菓			
アイスクリーム	1	2	0
合 計	10	21	0

表2 細菌検査結果(乳等を除く)

平成19年11~12月

食品区分	検査検体数	検査項目数	不適検体数	不適理由
魚介類	0	0	0	
冷凍食品				
無加熱摂取冷凍食品	3	6	0	
凍結直前加熱の加熱後摂取冷凍食品	14	28	0	
凍結直前未加熱の加熱後摂取冷凍食品	3	7	0	
魚介類加工品				
魚肉ねり製品	52	59	0	
ゆでかに	2	2	0	
肉・卵類及びその加工品				
非加熱食肉製品	6	28	0	
加熱食肉製品(包装後加熱)	10	20	0	
加熱食肉製品(加熱後包装)	43	129	0	
穀類及びその加工品				
生めん	12	36	0	
ゆでめん・むしめん	1	4	0	
菓子類				
洋生菓子	45	156	5	*1 大腸菌群陽性 3 *2 黄色ブドウ球菌陽性 2
和生菓子	2	6	0	
その他	2	6	0	
清涼飲料水				
ミネラルウォーター	3	4	0	
ミネラルウォーター(未殺菌)	4	12	0	
炭酸飲料	12	13	0	
その他の食品				
弁当類(加熱処理品)	2	6	1	*3 生菌数超過 1
弁当類(未加熱処理品)	3	10	0	
そうざい類(加熱処理品)	35	117	0	
そうざい類(未加熱処理品)	5	16	0	
煮豆	2	6	0	
合 計	261	671	6	

*1 大腸菌群(Deso法)で各々50/g、20/g、10/g

*2 黄色ブドウ球菌 いずれも100/g

*3 生菌数超過 460万/g

【細菌担当】

2 理化学検査

搬入された270検体の食品について食品添加物等の検査を行いました。今回は魚介類加工品、肉卵類加工品、野菜類・果物加工品、菓子類などを重点に、延べ3,618項目の検査を行いました(表3)。検査項目は保存料、着色料、甘味料、発色剤などを中心に行いました。

その結果、違反は2検体で、1検体は保存料であるソルビン酸が1.1g/kg検出された魚介乾製品(魚肉練り製品を伸したもの)でした。また、1検体は南部市場食品衛生検査所の早朝監視のスクリーニング試験で過酸化水素を検出したシラス干しで、定量検査の結果、0.12g/kg検出しました(表4)。その他の検体は、いずれも食品衛生法に適合していました。

表3 理化学検査結果

平成19年11~12月

大分類	検体数	違反数	項目数	検査項目							
				保存料	着色料	甘味料	酸化防止剤	漂白剤	発色剤	重金属類	その他
魚介類加工品	108	2	1,213	306	786	83		19	17		2
肉卵類及びその加工品	58		799	171	562	6			57		3
野菜類・果実及びその加工品	41		618	96	444	58	10	10			
菓子類	23		362	24	280	34	16	8			
清涼飲料水	15		284	108	144	20				12	
酒精飲料	1		4	3			1				
かん詰・びん詰食品	5		61	15	41		5				
その他の食品	21		277	57	191	10	14	4	1		
合計	272	2	3,618	780	2,448	211	46	41	75	12	5

表4 違反等検体一覧

平成19年11~12月

違反種類等	食品名	検体数	試験項目	検出値	備考
基準値超過	魚介乾製品	1	ソルビン酸	1.1 g/kg	基準値 1.0g/kg 以下
残存違反	シラス干し	1	過酸化水素	0.12 g/kg	最終食品の完成前に 過酸化水素を分解し、 または除去すること

【 食品添加物担当 】

平成19年度食品の食中毒菌汚染実態調査（その2）

食中毒菌汚染実態調査は平成10年から厚生省（現厚生労働省）が行なっている事業です。この調査は汚染食品の排除等、食中毒発生の未然防止対策を図るため、流通食品の汚染実態を把握することを目的として行われています。

本年度は、野菜類と肉類（生肉やローストビーフ等）について大腸菌、サルモネラ属菌、腸管出血性大腸菌（EHEC）O157、カンピロバクター・ジェジュニ/コリ（鶏肉、牛レバーのみ）、生食用かきについて赤痢菌、サルモネラ属菌、EHEC O157の調査を行ないました。野菜類については、検査情報9月号で結果を報告しました。今回は、9月（一部11月）に肉類（生肉やローストビーフ等）68検体と生食用かき18検体の計86検体について調査を行いましたので、その結果を報告します。

肉類68検体全てでEHEC O157は検出されませんでした。また、鶏肉、牛レバーのみ調査したカンピロバクター・ジェジュニ/コリも検出されませんでした。鶏肉1検体、豚肉2検体からサルモネラ属菌（血清型 Infantis が鶏肉1検体と豚肉1検体より検出、血清型 Typhimurium が豚肉1検体より検出）が検出されました。また、特定加熱食肉製品（ローストビーフ）以外の肉類29検体から大腸菌が検出されました。このうち、生食用表示がある馬肉1検体^{*1}（表1）は、生食用食肉の衛生基準不適（基準は、糞便系大腸菌群及びサルモネラ属菌が陰性）でした。生食用かき18検体からは赤痢菌、サルモネラ属菌、EHEC O157のいずれも検出されませんでした。

表1 食中毒菌汚染実態調査結果（肉類；衛生研究所検査分）

検体の種類	検査検体数	検査結果（陽性数）			
		大腸菌	サルモネラ属菌	EHEC O157	カンピロバクター・ジェジュニ/コリ
牛豚挽肉	7	4	0	0	
牛レバー	10	6	0	0	0
牛肉	26	6	0	0	
鶏肉	2	2	1	0	0
特定加熱食肉製品 （ローストビーフ）	5	0	0	0	
豚レバー	1	1	0	0	
豚肉	11	9	2	0	
馬肉	6	1 ^{*1}	0	0	
計	68	29	3	0	0

表2 食中毒菌汚染実態調査結果（生食用かき；衛生研究所検査分）

検体の種類	検査検体数	検査結果（陽性数）		
		赤痢菌	サルモネラ属菌	EHEC O157
生食用かき ^{*2}	18	0	0	0
計	18	0	0	0

^{*2} うち、7検体についてノロウイルス検査を実施。結果はすべて陰性。

【細菌担当】

流通魚中のPCB検査

平成19年度に中央卸売市場で収去した流通魚14種20検体(内、養殖魚3種5件)について、PCBの検査を行いました。その結果を表に示しましたが、PCBの暫定的規制値(遠洋沖合魚:0.5ppm、養殖魚(内海内湾):3ppm)を超えたものではありませんでした。なお、これらの検体については中央卸売市場の食品衛生検査所において総水銀の検査も行っています。

表 PCBの検査結果

					単位: ppm	
	産地	検体数	検出件数	PCB	暫定規制値	
【遠洋沖合魚】						
イサキ	三重県沖	1	0	不検出	0.5	
ウスメバル	青森県沖	1	0	不検出	0.5	
キンメダイ	静岡県沖	1	1	0.02	0.5	
サクラマス	北海道沖	1	0	不検出	0.5	
サワラ	福井県沖、宮崎県沖	2	0	不検出	0.5	
スルメイカ	福岡県沖	1	0	不検出	0.5	
チダイ	鹿児島県沖	1	0	不検出	0.5	
トビウオ	東京都八丈島沖	1	0	不検出	0.5	
マアジ	福井県沖	1	0	不検出	0.5	
マイワシ	千葉県沖	1	0	不検出	0.5	
マサバ	静岡県沖、千葉県沖、青森	3	2	0.01、0.01、不検出	0.5	
マダイ	福井県沖	1	0	不検出	0.5	
【養殖魚(内海内湾)】						
カンパチ	香川県産	1	1	0.02	3	
ヒラメ	韓国産	1	0	不検出	3	
マダイ	愛媛県産、愛媛県産、熊本	3	0	不検出	3	
計		20	4	-	-	

(検出限界 : 0.01ppm)

(PCBについて*))

PCBはPolychlorinated biphenylsの略称で、日本名ではポリ塩化ビフェニルといいます。PCBはベンゼン環が2つつながったビフェニル骨格の水素(H)が塩素(Cl)で置換されたものの総称で、置換塩素の数と位置によって理論上209種の異性体が存在します。PCB製品は、化学的安定性、高脂溶性、不燃性、高絶縁性、粘着性などのすぐれた物性を有するため、工業的用途が非常に広く、多方面に使用されました。

しかしながら、1968年、カネミ油症事件の発生によりPCBの毒性が社会問題化し、1972年に当時の通産省の行政指導に基づきPCBの製造中止、回収が指示されました。1971年の時点で、全世界のPCBの生産量の合計は100万トン位で、わが国の生産・輸入されたPCBの合計は約5万8千トンといわれています。そのうちの1万トン位がすでに環境中に放出されたといわれています。PCBは難分解性であるため、海洋を中心とした環境汚染が継続しています。そのため、現在でも、魚類から食物連鎖により蓄積したPCBが微量ながら検出されることがあります。

*) 2007年1月号、2006年1月号、2005年7月号にもPCBについての解説が掲載されています。

【 微量汚染物室 : PCB検査担当 】

感染症発生動向調査委員会報告 1月

今月のトピックス

麻疹は2008年1月から全数把握疾患となりました。市内では100例以上の報告があり、小学校入学前の予防接種(MRワクチン第2期接種)の徹底が望まれます。

インフルエンザは、一旦減少するも、再度増加中です。

【患者定点からの情報】

市内の患者定点は、小児科定点:84か所、内科定点:55か所、眼科定点:15か所、性感染症定点:26か所、基幹(病院)定点:3か所の計183か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の13感染症とを報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計139定点から報告されます。

平成19年12月24日から平成20年1月27日まで(平成19年第52週から平成20年第4週まで。ただし、性感染症については平成19年12月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

全数把握の対象

<麻疹>

1月から感染症法の5類感染症の全数把握の対象となり、診断した医師すべてに届出が義務付けられました。

(国立感染症研究所ホームページ

<http://idsc.nih.gov/jp/disease/measles/index.html>)

横浜市では、1月31日までの報告数は144例と、全国の中でも非常に多くなっています。年齢別では10代が過半数を占めています。また、半数以上が予防接種未接種でした。2012年麻疹排除に向けて、予防接種の徹底が最も大切です。

横浜市の詳細については、「麻疹(はしか)の流行について」

http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/2008nen/measles.pdf をご覧ください。

平成19及び20年 週 - 月日対照表

第52週	12月24～30日
第1週	12月31～1月6日
第2週	1月7～13日
第3週	1月14～20日
第4週	1月21～27日

《麻疹の排除に向けて》

2008年1月から、風しんとともに全数報告疾患として、発生状況等を詳細に把握。

2006年度より、麻疹単独ワクチンの1回接種から、麻疹風しん混合ワクチンによる2回接種に変更。

2008年4月より5年間、中1及び高3相当の年齢への定期接種を実施。

<レジオネラ症>

横浜市では、昨年は28例と、前年の4倍の報告がありました。今年も、1月は3例の報告があります。全国では、昨年は660例、今年第4週までの累計が50例となっています。

循環式浴槽やジャグジーなどをよく利用している異型肺炎患者の場合には、レジオネラ症の検索が重要と考えられます。

なお、衛生研究所と区福祉保健センターでは、原因究明と感染拡大の防止を目的に喀痰検査や施設調査、遺伝子検査を行っています。

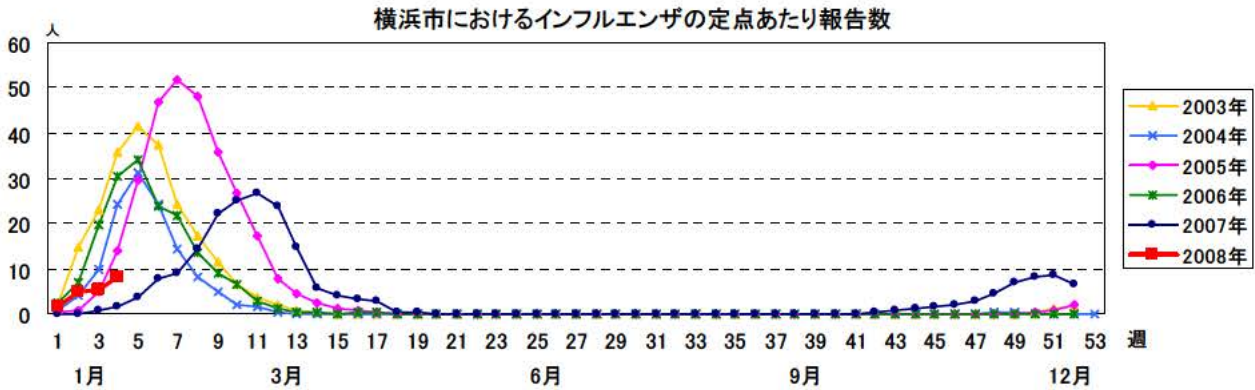
その他の疾患については、横浜市感染症発生動向調査全数情報をご覧ください。

http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/report.html#zensu

定点把握の対象

<インフルエンザ>

年末年始にかけて、横浜市でも全国と同様に減少しましたが、第2週以降は再び増加し、第4週は定点あたり8.21となっています。区別では、中区以外の17区で流行の目安となる「1.0」を超えており、都筑(17.2)、瀬谷(15.0)、栄(14.2)、磯子(12.7)、泉(11.0)、金沢(10.4)、戸塚(10.3)、港南(10.3)の8区で注意報レベルの「10」を超えています。川崎市は8.74で、横浜市とほぼ同じですが、神奈川県(横浜、川崎を除く)は14.88と高く、注意報レベルの「10」を超えています。



全国的には、ここ数年間は大きな流行が見られなかったAソ連型(AH1)が多く検出されています。横浜市の検査結果では、当初は今シーズンから使用されているワクチンと類似株でしたが、抗原変異したウイルス株が増加しつつあります。

最新の情報については

http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/2008nen/sokuhou.pdf をご覧ください。

<感染性胃腸炎>

11月後半から増加傾向が続いていましたが、第51週をピークに減少し、第4週は定点あたり8.14でした。

川崎市は9.97とやや横浜市より高め、神奈川県(横浜、川崎を除く)は8.20でした。

病院、施設等におけるノロウイルス感染の集団発生もあるため、職員の健康管理についても、十分注意を払う必要があります。

<RSウイルス感染症>

例年、インフルエンザに先がけて流行が見られます。今シーズンは、インフルエンザの流行がかなり早く始まりましたが、RSウイルス感染症は、例年通り12月に多く報告されていました。1月に入ってから、第1週が1人、第2週が14人、第3週が13人、第4週が6人と第2週以降は減少傾向です。

病原体定点から採取された検体からは、衛生研究所で、12月に10例、1月に5例が、PCR法で確認されました。うち、12月の1例と1月2例はAソ連型(AH1)インフルエンザとの重複感染でした。

<A群溶血性レンサ球菌咽頭炎>

第2週以降増加が続き、第4週は定点あたり1.59と、昨年に次いで高い値になっています。瀬谷(5.3)、都筑(3.8)、栄(3.7)で発生が目立ちます。昨年、一昨年とも、2月～3月にかけて高い値が続きましたので、今後の動向に注意が必要です。

川崎市は2.24と、横浜より高くなっています。神奈川県(横浜、川崎を除く)は1.76でした。

< 性感染症 >

性感染症は、診療科でみると産婦人科系(産婦)の11定点、および泌尿器科・皮膚科系(泌・皮)の15定点からの報告に基づき、1か月単位で集計されています。

12月は11月に比べて性器クラミジア感染症が増え、性器ヘルペスウイルス感染症が減りました。また、女性の淋菌感染症が3例ありました。

2007年は2006年と比較して、患者数についてあまり大きな変化はありませんでした。季節性もあまり見られず、また、10代が増えているといった傾向も特に見られません。ここ数年の男性の淋菌感染症の減少傾向は続いています。

【病原体定点からの情報】

市内の病原体定点は、小児科定点:8か所、インフルエンザ(内科)定点:5か所、眼科定点:1か所、基幹(病院)定点:3か所、の計17か所を設定しています。検体採取は、小児科定点8か所を2グループに分け、4か所ごと毎週実施し、インフルエンザ定点は特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。眼科と基幹定点は、対象疾患の患者から検体採取ができた時に随時実施しています。

衛生研究所から

< ウイルス検査 >

2008年1月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点40件(鼻咽頭ぬぐい液)、内科定点15件(鼻咽頭ぬぐい液)、眼科定点1件(結膜ぬぐい液)、基幹定点5件(鼻咽頭ぬぐい液2件、ふん便、髄液、血清各1件)でした。患者の臨床症状別内訳は、小児科定点は気道炎35人、発熱のみ3人、関節痛1人、口内炎1人、内科定点は関節痛7人、上気道炎4人、発熱のみ4人、眼科定点は流行性角結膜炎1人、基幹定点はインフルエンザ1人、痙攣重積1人でした。

2月8日現在、小児科定点の気道炎患者18人と発熱のみの患者3人と関節痛1人からインフルエンザウイルスAH1型、気道炎患者1人からインフルエンザウイルスAH3型、気道炎患者1人と口内炎患者1人からヘルペスウイルス1型、内科定点の発熱のみの患者4人、気道炎患者3人、関節痛3人からインフルエンザウイルスAH1型が分離されています。これ以外にPCR検査では、小児科定点の気道炎患者3人からRSウイルスの遺伝子が検出されています。また、インフルエンザウイルスAH1型が分離された患者2人からも、RSウイルスの遺伝子が検出されています。眼科定点は、流行性角結膜炎患者1人からアデノウイルスが分離されています。

基幹定点は、インフルエンザ患者1人からインフルエンザウイルスAH1型が分離されています。

その他の検体は引き続き検査中です。

< 細菌検査 >

1月の感染性胃腸炎関係の受付は8菌株で起因菌は検出されませんでした。溶血性レンサ球菌咽頭炎の検体の受付は5件でA群溶血性レンサ球菌が3件検出されました。

感染症発生動向調査における病原体検査1月

感染性胃腸炎		2008年1月			
検査年月	1月		2007年1～12月		
定点の区別	小児科	基幹	小児科	基幹	
件数	6		95		
菌種名					
サルモネラ					
腸管病原性大腸菌			8		
毒素原性大腸菌			4		
組織侵入性大腸菌					
腸管出血性大腸菌			2		
腸管凝集性大腸菌					
黄色ブドウ球菌					
カンピロバクター					
不検出	6		81		

呼吸器感染症等		2008年1月			
検査年月	1月		2007年1～12月		
定点の区別	小児科	基幹	小児科	基幹	
件数	5		17		
菌種名					
A群溶血性レンサ球菌	T3				
	T4		4		
	T6		1		
	T12		1		
	T25	2	2		
	T28	1			
	T型別不能				
B群溶血性レンサ球菌			1		
G群溶血性レンサ球菌					
インフルエンザ菌					
パラインフルエンザ菌					
黄色ブドウ球菌					
髄膜炎菌				1	
インフルエンザ菌				1	
不検出	2		8		

T(T型別): A群溶血性レンサ球菌の菌体表面のトリプシン耐性T蛋白を用いた型別方法

【細菌担当】

由来別病原菌検出状況 1月

2008年1月

検体の種類	分離菌株数					
	ヒト		環境		食品	
	糞便、尿、咽頭ぬぐい液、 喀痰等 菌株による依頼を含む		河川水、河川底泥等		食品、食品容器等のふきとり、 飲料水等	
	2008年 1月	2007年 1-12月	2008年 1月	2007年 1-12月	2008年 1月	2007年 1-12月
コレラ O - 1						
O - 1以外			1	22		
赤痢菌 A						
B		2				
C						
D	1	7				
その他		2				
チフス菌	1	1				
パラチフスA菌		2				
その他のサルモネラ						
O4群		17		2		1
O7群		2		1		
O8群		1				
O9群		2				
O3,10群				1		
その他						
腸管病原性大腸菌		8				
毒素原性大腸菌		47				
組織侵入性大腸菌						
腸管出血性大腸菌	2	90				
腸管凝集性大腸菌						
腸炎ビブリオ		17				2
黄色ブドウ球菌	1 *	28				
カンピロバクター	1	23				3
ウェルシュ菌		101				2
A群溶血性レンサ球菌	3	9				
B群溶血性レンサ球菌		1				
レジオネラ菌		7				
その他		3		2		
取り扱い件数	174		9		108	

* メチシリン耐性黄色ブドウ球菌

【細菌担当】

衛生研究所WEBページ情報(その47)

横浜市衛生研究所ホームページ(衛生研究所WEBページ)は、1998年3月に開設され、感染症情報、保健情報、食品衛生情報、生活環境衛生情報等を市民にわかりやすく提供しています。

今回は、2007年12月のアクセス件数、アクセス順位及び2008年1月の電子メールによる問い合わせ、WEB追加・更新記事について報告します。

なお、アクセス件数については行政運営調整局IT活用推進課から提供されたデータを基に集計しました。

1 利用状況

(1) アクセス件数 (2007年12月)

2007年12月の総アクセス数は、292,928件でした。主な内訳は、感染症60.7%、食品衛生11.8%、保健情報16.1%、生活環境衛生1.4%、検査情報月報4.6%でした。

(2) アクセス順位 (2007年12月)

12月のアクセス順位(表1)は、「MDMA(通称:エクスタシー)について」が第1位でした。

2位が「RSウイルスによる気道感染症およびパリビズマブ(Palivizumab)について」、3位が「インフルエンザワクチンについて」でした。

冬の感染症である「インフルエンザ」と「感染性胃腸炎」に関する記事が10位内に4つ入り、流行期をむかえ、関心が高かったものと思われます。

また、薬物関連記事が1位と8位に入っていました。

表1 2007年12月 アクセス順位

順位	タイトル	件数
1	MDMA(通称:エクスタシー)について	33,869
2	RSウイルスによる気道感染症およびパリビズマブ(Palivizumab)について	13,159
3	インフルエンザワクチンについて	13,064
4	マイコプラズマ肺炎について	10,173
5	ロタウイルスによる感染性胃腸炎について	8,328
6	2006(平成18)年度のインフルエンザワクチンについて	7,141
7	EBウイルスと伝染性単核症について	5,678
8	大麻(マリファナ)について	4,956
9	ノロウイルスによる感染性胃腸炎について	4,135
10	百日咳について	4,123

データ提供:行政運営調整局IT活用推進課

(3) 電子メールによる問い合わせ（2008年1月）

2008年1月にホームページのお問合わせフォームを通していただいた電子メールによる問い合わせの合計は、11件でした(表2)。

表2 2008年1月 電子メールによる問い合わせ

内容	件数	回答部署
リンクについて	1	衛生研究所
ウイルスに関する取材について	1	衛生研究所
トキソプラズマ症について	2	衛生研究所
トキソプラズマの検査について	1	衛生研究所
ポツリヌス菌について	2	衛生研究所
洗濯物の室内干しについて	1	衛生研究所
トリコテセン-マイコトキシンに関するホームページの記載について	1	衛生研究所
B群連鎖球菌について	1	衛生研究所
感染症法に基づく消毒・滅菌の手引きについて	1	衛生研究所

2 追加・更新記事（2008年1月）

2008年1月に追加・更新した主な記事は、7件でした(表3)。

表3 2008年1月 追加・更新記事

掲載月日	内容	備考
1月4日	インフルエンザワクチンについて	更新
1月4日	インフルエンザウイルスのインフルエンザ治療薬(抗ウイルス剤)に対する耐性について	更新
1月4日	感染症に気をつけよう	追加
1月17日	性器クラミジア感染症について	更新
1月28日	横浜市におけるインフルエンザ等の流行情報(その11)	追加
1月28日	高病原性鳥インフルエンザ(HPAI)の発生状況	更新
1月28日	麻しん(はしか)の流行について	追加

[感染症・疫学情報課]